

研 究

育児不安尺度の作成に関する研究 その1

— 4・5か月児, および, 10・11か月児の母親用モデル—

吉田 弘道¹⁾, 山中 龍宏²⁾, 巷野 悟郎³⁾
太田百合子⁴⁾, 山口規容子⁵⁾, 牛島 廣治⁶⁾

〔論文要旨〕

育児不安尺度の開発を目的に, 尺度の試案を作成し, 4・5か月児, および, 10・11か月児を育てている母親それぞれ500人を対象に調査を行った。妥当性検討のために STAI 状態・特性不安検査も同時に実施した。また信頼性の検討のために, それぞれ300人に3週間の間隔を置いて育児不安尺度の記入を2回依頼した。1回目の回収資料4・5か月児293人と10・11か月児265人の資料について因子分析したところ, 4・5か月児用モデルについては, 育児不安因子11項目とその他の因子23項目, 10・11か月児用モデルについては, 育児不安因子13項目とその他の因子29項目からなる育児不安尺度が作成された。また育児不安評定については, STAI の状態不安5段階との間で妥当性が確認された。さらに信頼性も確認された。

Key words : 育児不安尺度, 4・5か月児の母親用モデル, 10・11か月児の母親用モデル, 妥当性, 信頼性

I. はじめに

育児不安を測定する尺度としては, 1980年代には STAI 状態・特性不安検査や MAS (Manifest Anxiety Scale) のような不安検査が用いられてきた^{1,2)}。育児不安に特化した尺度としては, 牧野³⁾がわが国では早くに作成したが, この尺度はアンケートの域を出ていないものであった。その後田中ら⁴⁾が作成した尺度は, 妥当性と信頼性が確認されているが, 1~6歳の幼児を育てている母親を対象として作成されているために, 異なる年齢の子どもを育てている母親の育児不安の特徴を把握できない可能性があった。というの

は, 同じ項目を用いて測定した場合に, 育てている子どもの月齢や年齢によって母親の育児不安得点が異なるからである⁵⁾。川井らはこの点を改良した「育児困難感」を測定する尺度を開発し⁶⁾, 最終的には育児支援質問紙としてまとめている⁷⁾。この尺度は, 0~11か月児用, 1歳児用, 2歳児用, 3~6歳児用に分けて作られているので, 子どもの年齢の違いによる母親の育児意識の特徴をより適切に把握できる可能性がある。ただ, 乳児期と3歳以降の幼児期については, 測定対象の月齢や年齢の幅が広いようである。以上述べたような課題を受けて, 筆者らは, 適切でかつ使いやすい育児不安尺度を作成する試みを行ってきた。これ

The Study for the Development of Maternal Anxiety Scales-1 :
Models for Mothers Rearing 4・5 Month-old and 10・11 Month-old Infants
Hiromichi YOSHIDA, Tatsuhiro YAMANAKA, Goro KHONO,
Yuriko OTA, Kiyoko YAMAGUCHI, Hiroshi USHIJIMA

[2462]

受付 12.10.1
採用 13.6.25

1) 専修大学人間科学部 (研究職/教育職/臨床心理士)

2) 緑園こどもクリニック (医師/小児科)

3) 母子保健推進会議 (医師/小児科)

4) こどもの城小児保健部 (栄養士)

5) 愛育病院 (医師/小児科)

6) 東京大学・日本大学 (研究職/教育職/医師/小児科)

別刷請求先: 吉田弘道 専修大学人間科学部心理学研究室 〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1

Tel: 044-911-1015 Fax: 044-922-4175

までに、1・2か月児用、1歳半児用のモデルについて報告している^{8,9)}。しかし、育児不安の項目数がや多いため、小児保健関係の臨床現場では使いにくいとの声が寄せられた。そこで、このような評を受けて、項目数をより少なくすることと、対象年齢の異なる尺度の構造に一貫性を持たせることを考えて、これまでに報告した1歳半児用モデルを再分析するとともに、未発表であった4・5か月児用、10・11か月児用、2歳児用モデルについて報告することにした。なお、すでに報告した1・2か月児用モデルは全体の項目数が38と少なく、育児不安因子の項目も10と少ないので、再分析の対象にしなかった。本論文では、4・5か月児用と10・11か月児用モデルの構造と妥当性、および、信頼性について報告する。

II. 方 法

1. 調査対象者および調査方法

ある育児雑誌の全国の購読者リストから、第1子の4・5か月児、および、10・11か月児を育てている母親それぞれ500人ずつ（子どもの性別：男子250人、女子250人）計1,000人を無作為に抽出し、育児不安調査用紙1通とSTAI1通を郵送した。このうち300人は再テスト用の調査用紙をもう1通同時に郵送した。まず調査用紙1通とSTAI1通を同時に郵送にて回収した後、3週間の間隔を置いて再テスト用の調査用紙を回収した。調査期間は1997年2～3月であった。なお、今回は家族形態、母親の就労状況は調査しなかった。

この調査の実施にあたっては、育児不安尺度を作成することを目的とする調査であることと、収集した資料は全体で統計的に分析するため個人の資料が公表されることはないことを調査依頼書に明記したうえで調査協力を依頼した。

2. 調査用紙

(1) 育児不安尺度試案

今回用いた育児不安尺度試案は、筆者らが作成したものであり、母親の育児不安19項目と、それに影響を及ぼすと考えられる夫のサポート7項目、相談相手の有無4項目、子どもの気質や育てやすさ8項目、そして、母親の育児意識・育児満足17項目の計55項目で構成した。この試案の作成に当たっては、これまでの育児意識や母子関係に関する研究^{2,10,11)}を参考にした。特に育児不安項目の選択に当たっては、筆者らが、育児不安

を、育児に伴う自信のなさや不安、子どもと関わることの疲労感、子育てからの逃避願望、育児による社会からの孤立感などとしてとらえていたので⁸⁾、この観点に立って選択した。それぞれの項目について、〈全くそう思わない〉、〈いくらかそう思う〉、〈ときどきそう思う〉、〈よくそう思う〉の4段階で回答を求め、この4段階に対して、1～4点を与えて整理した。

(2) 日本版 STAI 状態・特性不安検査

育児不安尺度を用いて測定される不安の程度の妥当性を確認するため、育児不安研究で用いられる日本版 STAI 状態・特性不安検査¹²⁾を用いた。状態不安20項目、特性不安20項目から構成されており、状態不安については、〈全くちがう〉、〈いくらか〉、〈まあそうだ〉、〈その通りだ〉の4段階、特性不安については、〈ほとんどない〉、〈ときたま〉、〈しばしば〉、〈しょっちゅう〉の4段階で回答を求め、この4段階に1～4点を与えて整理した。最終的には、状態不安、特性不安それぞれの合計得点から、不安5段階に整理した。

3. 統計分析

以下の①～⑦までの統計分析を行った。①因子の抽出を行うために55項目について、これまでに報告した育児不安尺度^{8,9)}との統一を持たせることを考えて6因子を指定して因子分析(直交バリマックス回転)を行った。②項目の選択作業として、各因子において、負荷量0.40未満だった項目を削除して再度因子分析を行った。③その後同じ因子内の項目で、内部相関係数が0.35未満を多く示した項目は、因子内の項目一貫性を低下させるので除外した。また内部相関係数0.60以上を示した項目は類似した内容の項目であるので、どちらか一方を削除した。④最終的に得られた項目について、同一因子内の項目の内的整合性を確認し、合計得点の信頼性を検討するために、クロンバッハの α 信頼性係数を求めた。⑤選択作業を経て残った育児不安項目の合計得点の平均値と標準偏差値を求め、この数値に基づいて育児不安段階を5段階に整理した。⑥5段階評定の妥当性を検討するために、育児不安5段階評定と、日本版 STAI の状態不安5段階評定との間で、ピアソンの相関係数を求めた。⑦信頼性を検討するために、各因子の合計得点と育児不安5段階評定について、1回目と2回目の調査結果との間でピアソンの相関係数を求めた。以上の統計分析には SPSS V19 (Windows 版)を用いた。

表1 分析対象者

	母親の人数と 子どもの性別	子どもの 月齢	母親の年齢区分					母親の学歴				
			20歳 未満	20代	30代	40歳 以上	不明	中学卒	高校卒	専門学校 ・短大卒	大学・ 大学院卒	不明
4・5か月児	293 (男136, 女157)	4か月: 218 5か月: 75	0 (0.0)	205 (69.9)	82 (28.0)	2 (0.7)	4 (1.4)	7 (2.4)	148 (50.5)	99 (33.8)	27 (9.2)	12 (4.1)
10・11か月児	265 (男129, 女135, 不明1)	10か月: 207 11か月: 58	1 (0.4)	179 (67.8)	84 (31.8)	0 (0.0)	1 (0.4)	12 (4.5)	109 (41.1)	103 (38.9)	29 (10.9)	12 (4.5)

Ⅲ. 結 果

1. 分析資料の内訳

4・5か月児については、304人分の資料が回収され、回収率は60.8%であった。304人分の資料のうち内容に不備のあった資料を除く293人分の資料を分析の対象とした。再テストの回収数は82人分であり、回収率は27.3%であった。10・11か月児については、267人分の資料が回収され、回収率は53.4%であった。267人分の資料のうち内容に不備のあった資料を除く265人分の資料を分析の対象とした。再テストの回収数は85人分であり、回収率は28.3%であった。母親の年齢や学歴などは表1に示した通りであった。

2. 育児不安尺度の因子構造, および, 項目の選択結果

(1) 4・5か月児用

因子分析を行った結果、固有値の高い順に、「育児不安」、「夫のサポート」、「育児満足」、「子どもの育てやすさ」、「自信のなさ」、「相談相手の有無」と名付けられる6つの因子が抽出された。この6因子それぞれにおいて負荷量0.4未満の項目を削除した後、再度因子分析を実施したところ35項目が選択された(表2)。さらに、前述した基準に基づいて項目を選択した結果33項目が残った。残った33項目に正常発達を確認する項目55を1つ加えて34項目とした。項目の内訳は、「育児不安」11項目、「夫のサポート」6項目、「育児満足」5項目、「子どもの育てやすさ」4項目、「自信のなさ」5項目、「相談相手の有無」3項目であった。各因子の α 信頼性係数は.68～.87であった(表3)。

(2) 10・11か月児用

因子分析を行った結果、固有値の高い順に、「育児満足」、「育児不安」、「夫のサポート」、「子どもの育てやすさ」、「自信のなさ」、「相談相手の有無」と名付けられる6つの因子が抽出された。この6因子それぞれ

において負荷量0.4未満の項目を削除した後、再度因子分析をしたところ50項目が選択された(表4)。さらに、前述した基準に基づいて項目を選択した結果41項目が残った。残った41項目に正常発達を確認する項目55を1つ加えて42項目とした。項目の内訳は、「育児満足」10項目、「育児不安」13項目、「夫のサポート」8項目、「子どもの育てやすさ」4項目、「自信のなさ」4項目、「相談相手の有無」3項目であった。各因子の α 信頼性係数は.63～.88であった(表5)。

3. 育児不安5段階評定と妥当性および信頼性

筆者らは、育児不安得点を5段階に整理することで、育児不安の高い母親に対して集中的にサポートをすることができるのではないかと考えている^{8,9)}。今回においても、その方法を踏襲した。

4・5か月児においては、「育児不安」11項目の合計得点を「育児不安得点」として求めた。その結果、44点満点中得点レンジは11～36点、平均値21.28点、標準偏差値5.76点であった。この数値に基づき、平均値 $\pm 1/2$ SD, ± 1 SDを基準に不安段階を5段階に整理した。その結果、不安が最も高い第V段階の割合は12.2%となった。10・11か月児についても「育児不安」13項目の合計得点を「育児不安得点」として求めたところ、52点満点中得点レンジは13～48点、平均値28.83点、標準偏差値7.88点であった。この数値に基づき、平均値 $\pm 1/2$ SD, ± 1 SDを基準に不安段階を5段階に整理した。その結果不安が最も高い第V段階は15.5%となった(表6)。

この育児不安5段階評定の妥当性を検討するために、育児不安5段階評定とSTAIの状態不安5段階評定との間でピアソンの相関係数を求めた。その結果、4・5か月児, 10・11か月児とも比較的高い正の相関関係が認められた($r = .57, p < .0001$; $r = .55, p < .0001$)(表7)。

表2 4・5か月児用項目 因子分析の結果 (直交バリマックス回転)

因子および項目	35項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
因子1：育児不安 11項目							
21	子育ては自分には合っていないので早く好きなことがしたい	0.46					
23	毎日生活していて心に張りが感じられない	0.50					
24	疲れやストレスがたまっていてイライラする	0.64					
26	ゆったりとした気分で子どもと過ごせない気がする	0.44					
27	子どもを育てていて自分だけが苦勞していると思う	0.54					
31	何か心が満たされず空虚である	0.60					
38	子育てを離れて一人になりたい気持ちになることがある	0.59					
39	一人で子どもを育てている感じがして気持ちが落ち込む	0.52					
41	体の疲れがとれずいつも疲れている感じがする	0.57					
43	だれも自分の子育ての大変さをわかってくれないと思う	0.53					
46	育児や家事など何もしたくない気持ちになることがある	0.56					
因子2：夫のサポート 6項目							
12	夫は家事に協力的である		0.58				
15	夫と自分の二人で子どもを育てている感じがする		0.66				
37	夫といろいろなことを話す時間がある		0.73				
40	夫は子どもの相手をよくしてくれる		0.72				
45	夫は自分のことを理解してくれていると思う		0.65				
47	家庭内の重要な決定をするのに夫がいてくれてよかったと思う		0.67				
因子3：育児満足 7項目							
1	子どもを育てるのが楽しい			0.64			
2	子どもの成長を楽しみに思う			0.42			
6	子どもを産んでよかったと思う			0.50			
14	母親として子どもに接している自分も好きに思える			0.45			
18	子育ては自分にとってやりがいのあることだと思う			0.53			
22	子どもをもつ母親としてしみじみとした幸せを感じる			0.62			
28	子どもを宝物のように大切に思える			0.61			
因子4：子どもの育てやすさ 3項目							
48	育てやすい子どもであると思う				0.81		
52	寝たり起きたりのリズムが安定している子どもであると思う				0.52		
53	機嫌のよいことが多い子どもだと思う				0.62		
因子5：自信のなさ 5項目							
8	自分うまく子どもを育てていないと思うことがある					0.49	
*10	自分がほかのだれよりも自分の子どものことをわかっていると思う					0.45	
*25	子どもは私と一緒にいるのを楽しんでいると思う					0.45	
29	子どもを育てていてどうしたらいいかわからなくなることがある					0.53	
35	自分は子どものことをわかっていないのではないかと思うことがある					0.61	
因子6：相談相手の有無 3項目							
7	子育てのことで相談できる人がいてよかったと思う						0.80
34	何でも打ち明けて相談できる人がいてよかったと思う						0.77
*44	子どものことでだれに相談したらいいかわからなくて困ることがある						0.54
	固有値	10.12	3.30	2.86	2.45	1.85	1.59
	寄与率 (%)	10.68	9.64	8.97	6.03	5.95	4.27
	累積寄与率 (%)	10.68	20.32	29.29	35.32	41.29	45.54
	*印は逆転得点項目						

表3 4・5か月児用 最終項目

34項目

因子1：育児不安 11項目	$\alpha = .87$
21 子育ては自分には合っていないので早く好きなことがしたい	
23 毎日生活していて心に張りが感じられない	
24 疲れやストレスがたまっていてイライラする	
26 ゆったりとした気分で子どもと過ごせない気がする	
27 子どもを育てていて自分だけが苦勞していると思う	
31 何か心が満たされず空虚である	
38 子育てを離れて一人になりたい気持ちになることがある	
39 一人で子どもを育てている感じがして気持ちが落ち込む	
41 体の疲れがとれずいつも疲れている感じがする	
43 だれも自分の子育ての大変さをわかってくれないと思う	
46 育児や家事など何もしたくない気持ちになることがある	
因子2：夫のサポート 6項目	$\alpha = .84$
12 夫は家事に協力的である	
15 夫と自分の二人で子どもを育てている感じがする	
37 夫といろいろなことを話す時間がある	
40 夫は子どもの相手をよくしてくれる	
45 夫は自分のことを理解してくれていると思う	
47 家庭内の重要な決定をするのに夫がいてくれてよかったと思う	
因子3：育児満足 5項目	$\alpha = .77$
1 子どもを育てるのが楽しい	
14 母親として子どもに接している自分も好きに思える	
18 子育ては自分にとってやりがいのあることだと思う	
22 子どもをもつ母親としてしみじみとした幸せを感じる	
28 子どもを宝物のように大切に思える	
因子4：子どもの育てやすさ 4項目	$\alpha = .68$
48 育てやすい子どもであると思う	
52 寝たり起きたりのリズムが安定している子どもであると思う	
53 機嫌のよいことが多い子どもだと思う	
55 子どもの発育発達はおおむね順調である	
因子5：自信のなさ 5項目	$\alpha = .72$
8 自分はうまく子どもを育てていないと思うことがある	
*10 自分がほかのだれよりも自分の子どものことをわかっていると思う	
*25 子どもは私と一緒にいるのを楽しんでいると思う	
29 子どもを育てていてどうしたらいいかわからなくなることがある	
35 自分は子どものことをわかっているのではないかと思うことがある	
因子6：相談相手の有無 3項目	$\alpha = .79$
7 子育てのことで相談できる人がいてよかったと思う	
34 何でも打ち明けて相談できる人がいてよかったと思う	
*44 子どものことでだれに相談したらいいかわからなくて困ることがある	

*印は逆転得点項目

表4 10・11か月児用項目 因子分析の結果 (直交バリマックス回転)

因子および項目	50項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
因子1: 育児満足 14項目							
1	子どもを育てるのが楽しい	0.68					
2	子どもの成長を楽しみに思う	0.56					
6	子どもを産んでよかったと思う	0.69					
9	子どもに着せる服のことを考えるのは楽しい	0.42					
10	自分がほかのだれよりも自分の子どものことをわかっていると思う	0.44					
14	母親として子どもに接している自分も好きに思える	0.60					
18	子育ては自分にとってやりがいのあることだと思う	0.54					
20	子どもを育てていながら自分はこの子にとって必要な存在だと思う	0.51					
22	子どもをもつ母親としてしみじみとした幸せを感じる	0.69					
25	子どもは私と一緒にいるのを楽しんでいると思う	0.58					
28	子どもを宝物のように大切に思える	0.58					
30	子どもと一緒にいるとゆったりとした気分になる	0.56					
36	子どもの相手をするのは楽しい	0.69					
54	一緒にいるのが楽しいと思える子どもである	0.64					
因子2: 育児不安 14項目							
*16	子どもができてから仕事に困難を感じるが、それはそれでよしと思える		0.43				
17	子育てをするようになってから社会的に孤立しているように思える		0.41				
21	子育ては自分には合っていないので早く好きなことがしたい		0.48				
23	毎日生活していて心に張りを感じられない		0.51				
24	疲れやストレスがたまっていてイライラする		0.67				
26	ゆったりとした気分で子どもと過ごせない気がする		0.52				
27	子どもを育てていて自分だけが苦勞していると思う		0.61				
29	子どもを育てていてどうしたらいいかわからなくなる時がある		0.50				
31	何か心が満たされず空虚である		0.59				
38	子育てを離れて一人になりたい気持ちになることがある		0.67				
39	一人で子どもを育てている感じがして気持ちが落ち込む		0.58				
41	体の疲れがとれずいつも疲れている気がする		0.54				
43	だれも自分の子育ての大変さをわかってくれないと思う		0.58				
46	育児や家事など何もしたくない気持ちになることがある		0.64				
因子3: 夫のサポート 8項目							
*5	家族と気持ちがよく通じ合っていないと思うことがある			0.48			
12	夫は家事に協力的である			0.66			
15	夫と自分の二人で子どもを育てている感じがする			0.70			
32	夫はよく相談相手になってくれると思う			0.82			
37	夫といろいろなことを話す時間がある			0.77			
40	夫は子どもの相手をよくしてくれる			0.74			
45	夫は自分のことを理解してくれていると思う			0.81			
47	家庭内の重要な決定をするのに夫がいてくれてよかったと思う			0.75			
因子4: 子どもの育てやすさ 6項目							
48	育てやすい子どもであると思う				0.84		
49	わかりやすい子どもであると思う				0.68		
50	体の丈夫な子どもであると思う				0.55		
*51	育てるのに大変手がかかる子どもであると思う				0.66		
52	寝たり起きたりのリズムが安定している子どもであると思う				0.46		
53	機嫌のよいことが多い子どもだと思う				0.61		
因子5: 自信のなさ 4項目							
8	自分はうまく子どもを育てていないと思うことがある					0.68	
19	子どもを育てる自信がないと思うことがある					0.72	
33	自分の子どもの育て方はこれでいいのだろうかと思うことがある					0.73	
35	自分は子どものことをわかっているのではないかと思うことがある					0.62	
因子6: 相談相手の有無 4項目							
7	子育てのことで相談できる人がいてよかったと思う						0.71
*11	子どものことでだれも相談する相手がいなくて困ることがある						0.72
34	何でも打ち明けて相談できる人がいてよかったと思う						0.74
*44	子どものことでだれに相談したらいいかわからなくて困ることがある						0.76
	固有値	12.10	4.18	3.09	2.63	2.03	1.54
	寄与率 (%)	11.88	10.92	9.81	6.55	6.29	5.70
	累積寄与率 (%)	11.88	22.80	32.61	39.15	45.44	51.15
	*印は逆転得点項目						

表5 10・11か月児用 最終項目

42項目

因子1： 育児満足 10項目	$\alpha = .84$
1 子どもを育てるのが楽しい	
2 子どもの成長を楽しみに思う	
6 子どもを産んでよかったと思う	
14 母親として子どもに接している自分も好きに思える	
18 子育ては自分にとってやりがいのあることだと思う	
20 子どもを育てていながら自分はこの子にとって必要な存在だと思う	
22 子どもをもつ母親としてしみじみとした幸せを感じる	
25 子どもは私と一緒にいるのを楽しんでいると思う	
28 子どもを宝物のように大切に思える	
30 子どもと一緒にいるとゆったりとした気分になる	
因子2： 育児不安 13項目	$\alpha = .88$
17 子育てをするようになってから社会的に孤立しているように思える	
21 子育ては自分には合っていないので早く好きなことがしたい	
23 毎日常生活していて心に張りが感じられない	
24 疲れやストレスがたまっていてイライラする	
26 ゆったりとした気分子どもと過ごせない気がする	
27 子どもを育てていて自分だけが苦勞していると思う	
29 子どもを育てていてどうしたらいいかわからなくなるときがある	
31 何か心が満たされず空虚である	
38 子育てを離れて一人になりたい気持ちになることがある	
39 一人で子どもを育てている感じがして気持ちが落ち込む	
41 体の疲れがとれずいつも疲れている感じがする	
43 だれも自分の子育ての大変さをわかってくれないと思う	
46 育児や家事など何もしたくない気持ちになることがある	
因子3： 夫のサポート 8項目	$\alpha = .88$
*5 家族と気持ちがよく通じ合っていないと思うことがある	
12 夫は家事に協力的である	
15 夫と自分の二人で子どもを育てている気がする	
32 夫はよく相談相手になってくれると思う	
37 夫といろいろなことを話す時間がある	
40 夫は子どもの相手をよくしてくれる	
45 夫は自分のことを理解してくれていると思う	
47 家庭内の重要な決定をするのに夫がいてくれてよかったと思う	
因子4： 子どもの育てやすさ 4項目	$\alpha = .63$
48 育てやすい子どもであると思う	
50 体の丈夫な子どもであると思う	
53 機嫌のよいことが多い子どもだと思う	
55 子どもの発育発達はおおむね順調である	
因子5： 自信のなさ 4項目	$\alpha = .81$
8 自分はうまく子どもを育てていないと思うことがある	
19 子どもを育てる自信がないと思うことがある	
33 自分の子どもの育て方はこれでいいのだろうかと思うことがある	
35 自分は子どものことをわかっていないのではないかと思うことがある	
因子6： 相談相手の有無 3項目	$\alpha = .81$
7 子育てのことで相談できる人がいてよかったと思う	
*11 子どものことでだれも相談する相手がなくて困ることがある	
34 何でも打ち明けて相談できる人がいてよかったと思う	

*印は逆転得点項目

表6 育児不安5段階の分布

	段階	第I段階 不安低い	第II段階 不安比較的低い	第III段階 不安中等度	第IV段階 不安比較的高い	第V段階 不安高い
	範囲	~-1SD 未満	-1SD ~ -1/2SD 未満	-1/2SD ~ +1/2SD	+1/2SD 超える~ +1SD	+1SD 超える
4・5か月児	得点範囲 (点)	~16	17~19	20~26	27~29	30~
	分布割合 (%)	23.6	16.2	36.5	11.5	12.2
10・11か月児	得点範囲 (点)	~20	21~24	25~32	33~36	37~
	分布割合 (%)	14.8	20.5	30.3	18.9	15.5

表7 妥当性および信頼性の結果 (r)

	4・5か月児	10・11か月児
育児不安5段階と STAI5段階	.57 **	.55 **
育児不安5段階	.68 **	.83 **
育児不安	.77 **	.87 **
夫のサポート	.78 **	.88 **
育児満足	.47 **	.87 **
自信のなさ	.39 **	.71 **
相談相手の有無	.51 **	.74 **
育てやすさ	.73 **	.82 **

注) 妥当性: 育児不安5段階評定とSTAIの状態不安5段階評定との相関。信頼性: 1回目と2回目の相関。** p < .0001

また「育児不安得点」の信頼性を検討するために、1回目と2回目の調査によって得られた「育児不安得点」についてピアソンの相関係数を求めたところ、4・5か月児、10・11か月児とも高い正の相関関係が認められた ($r = .77, p < .0001$; $r = .87, p < .0001$)。育児不安5段階評定についても1回目と2回目の調査結果の間で信頼性を検討したところ、4・5か月児では比較的高い正の相関が ($r = .68, p < .0001$)、また10・11か月児では高い正の相関 ($r = .83, p < .0001$) が認められた。この他の因子の得点についても同様の方法で信頼性を検討したところ、4・5か月児では「自信のなさ」を除いて比較的高い~高いまでの正の相関関係が認められた ($r = .47 \sim .78$)。10・11か月児でも、高い正の相関関係が認められた ($r = .71 \sim .88$)。ただ、4・5か月児の相関係数は、10・11か月児の相関係数と比較して総じて低く、特に「育児満足」 ($r = .47$)、
「自信のなさ」 ($r = .39$)、
「相談相手の有無」 ($r = .51$) は低かった (表7)。

IV. 考 察

1. 尺度構成および項目数について

結果で示したように、6因子からなる尺度を提示した。また、妥当性および信頼性についても確認された。このうち、再テスト法によって信頼性を検討した相関係数が、10・11か月児よりも4・5か月児の方が低かった。この違いについては、どちらも3週間の間隔を置いて記入を依頼したのであるが、同じ3週間であっても、4・5か月児の母親の子育て意識の変化の大きさを反映しているものと考えられる。この結果から、「育児不安段階」と「育児不安」、「育児満足」、「育てやすさ」それぞれの得点の相関係数はそれほど低くなかったので、4・5か月児用の尺度としての信頼性は認められたといえるが、乳児期初期においては、月齢に一致した尺度を用いることの重要性が改めて確認された。

臨床の現場で使いやすい尺度を作ることを念頭に置いて項目を厳選した結果、最終的には、全体の項目数が少なく、また育児不安因子については、4・5か月児用モデル11項目、10・11か月児用モデル13項目になった。バリマックス回転による因子分析を行っていることから育児不安因子のみを独立して用いることができるので、育児相談や乳児健診の前に記入して持ってきてもらうことで、育児不安を測定するのに役立つのではないかと期待される。なお、すでに報告した1・2か月児用モデル⁸⁾でも育児不安因子の項目は10項目であり、使いやすい尺度としての考え方は踏襲できているといえる。

2. 育児不安の段階について

結果で示したように、本モデルでは、育児不安を5段階に評定する方法をとっている。この育児不安の5段階評定を用いることで、小児医療・保健関係者が、育児不安第V段階の高い不安を示した母親をスクリー

ニングして、重点的に相談・援助活動を行えるのではないかと考えている。また、この評定方法を用いることにより、子どもの月齢の異なる母親について育児不安の推移をとらえることができる。ところで、どの程度の不安ポイントをスクリーニング基準とし、重点的に対応するかについてであるが、筆者らが開発した1・2か月児用モデルでは育児不安第V段階は15.8%であった⁸⁾。今回の結果では第V段階の割合は4・5か月児モデルで12.2%、10・11か月児モデルで15.5%であった。3・4か月児健診でエジンバラ産後うつ病自己評価票を使った調査では、9点以上を示した母親は受診した母親の約14%であったとする報告がある¹³⁾。また平成22年度幼児健康度調査では、母親のうち「育児に自信がもてない」23%、「子育てに困難を感じる」26%ということである¹⁴⁾。このような資料と合せて考えると、今回の第V段階の割合は妥当ではないかと考えている。

この5段階評定については、育児不安研究に用いられるSTAI不安検査の評定との間で妥当性が確認された。妥当性について検討されている育児不安尺度が少ないなかで、このような試みは意味があるといえる。また、この5段階評定については再テスト法により信頼性についても検討した。結果では高い相関関係が得られたが、回収率が27%、28%と低かったことに課題が残されているといえる。

付 記

本調査研究にご協力いただいた多くのお母さん方と「たまごクラブ」、「ひよこクラブ」に感謝申し上げます。本研究は、専修大学の平成24年度長期国内研究の期間を利用してまとめたものである。

文 献

- 1) 佐々木英子, 清水凡生. 乳児をもつ母親の育児不安について. 小児保健研究 1986; 45: 290-293.
- 2) 森 ウメ子. 幼児期の子育てにかかわる母親の意識と子どもの健康状態その関連性について—STAI(状態不安)による分析. 看護技術 1995; 41: 538-544.
- 3) 牧野カツコ. 乳幼児をもつ母親の生活と<育児不安>. 家庭教育研究所紀要 1982; 3: 34-56.
- 4) 田中宏二, 難波茂美. 育児ストレス尺度の作成. 岡山大学教育学部研究集録 1997; 106: 179-183.

- 5) Yoshida H, Yamanaka T, Khono G, et al. Differences in anxiety variables of mothers rearing first-born infants: A pilot study of the maternal anxiety screening scale. in M. Matsushita & I. Fukunishi eds. Cutting Edge Medicine and Liaison Psychiatry. Psychiatric Problems of Organ Transplantation, Cancer, HIV/AIDS and Genetic Therapy. Amsterdam: Elsevier Science, 1999: 193-202.
- 6) 川井 尚, 庄司順一, 千賀悠子, 他. 育児不安に関する臨床的研究Ⅳ—育児困難感のプロフィールの評定試案一. 日本総合愛育研究所紀要 1998; 34: 93-111.
- 7) 子ども家庭総合研究所・愛育相談所編著. 子ども総研式・育児支援質問紙手引き. 子ども家庭総合研究所・愛育相談所, 1999.
- 8) 吉田弘道, 山中龍宏, 太田百合子, 他. 育児不安スクリーニング尺度の作成に関する研究—1・2か月児の母親用試作モデルの検討—. 小児保健研究 1999; 58: 697-704.
- 9) 吉田弘道, 山中龍宏, 太田百合子, 他. 育児不安尺度の作成に関する研究—1歳半児の母親用試作モデルの検討. チャイルドヘルス 1999; 2: 139-143.
- 10) 庄司順一, 恒次欽也, 川井 尚, 他. 育児における父親の関わりに関する研究—育児に関するアンケート結果のクロス集計(1). 平成6年度厚生省心身障害研究—少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究報告書, 1994: 75-101.
- 11) 大藪 泰, 前田忠彦. 乳児をもつ母親の育児満足感の形成要因Ⅰ—4か月児と10か月児の母親の比較—. 小児保健研究 1994; 53: 826-834.
- 12) 水口公信, 下仲順子, 中里克治. 日本版 STAI 状態・特性不安検査. 京都: 三京房, 1991.
- 13) Nishizono-Maher A, et al. The role of self-report questionnaire in the screening of postnatal depression: A community sample survey in central Tokyo. Social Psychiatry & Psychiatric Epidemiology 2004; 39: 185-190.
- 14) 日本小児保健協会 平成22年度幼児健康度調査委員会. 平成22年度幼児健康度調査速報版. 小児保健研究 2011; 70: 448-457.

[Summary]

The maternal anxiety scales for mothers of 4 to 5

month-old and 10 to 11 month-old infants were developed with participation of 293 and 265 mothers. Factor analysis yielded six factors related to maternal anxiety, support from husband, satisfaction from child rearing, characteristics of child (easiness to rear), support from others, and diffidence to rearing. The scales were designed to be rated at 5 grades using the total score for maternal anxiety factor. Validities of the 5 grades of anxiety of the scales were also indicated by high correlation with scores on the 5 grades of state anxiety of the State-Trait-Anxiety Inventory. The reliabilities of the

scales were also supported by its factor analytic structure, relatively high internal consistency, and test-retest correlation over 3 weeks. These results suggest that these scales may be useful for screening mothers with high anxiety from infant rearing in order to better support them.

[Key words]

maternal anxiety scale, 4 to 5 month-old infants, 10 to 11 month-old infants, validity, reliability